
これが主人公でいいんですか？ 外伝

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これが主人公でいいんですか？ 外伝

【Nコード】

N2323U

【作者名】

銀

【あらすじ】

春休み。気力欠乏症を自称する織部時哉は妹の優姫伝いに爆弾発言を聞いた。

「お父さん、再婚するんだって」

以前自身のサイトで掲載していたバカテス×生存を思い切り設定を変えて新作として執筆していきます。一応自身のサイトにも掲載。

プロローグ (前書き)

あらすじにも書きましたが、以前のバカテス×生存とは主人公以外が全く違った状態ですのでご注意ください。

プロローグ

信じられないくらいに端麗な顔立ちをした美少年がそこにいた。それはまるで何処かの西洋人形のよう。

光る滝の如く輝きを放つ白銀の長髪は陽光を受けると仄かな紫陽花色を鱗片に見せて癖ひとつなく背中に流れる。瞳は横長で吊り目なアメジスト。宝石のように人の心を鷲掴む魅惑的な光彩。白皙の肌には染みはおろか黒子一つなく、薄く柔らかな曲線を描いた唇の色と鮮やかに対を為している。

完璧だった。絶世の美少女ならぬ美少年だった、その男は。どれだけ見つめても、どの角度から見つめても、難癖をつけられる部分は何処にもない完璧な美貌の持ち主だった。

青年は校門の壁に背を預けて腕を組み、溶け込むように静止して時折中を伺う。どうやら待ち人がいるようだった。

しかし、その姿すらも絵画の一枚のように美しい。

青年は揺らぎ一つない水面の如く雰囲気を醸し出しており、容姿のそこそこ整った連中に見受けられるチャラチャラした軽さは感じられない。おそらく青年は穏やかな笑みを浮かべ、玲瓏たる美声で待ち人を出迎えることだろう。

「ごめん、待った？」

「ううん。全然そんなことないよ」

そう、そんな会話。

初々しいカップルが交わすような平穏で少しの幸せが舞う、そんな会話。

そんな一時。

「お〜い！ 時哉〜！」

と、元気で響きの良い声が近付いて来た。

校舎から颯爽と駆け付ける少女は、これまた端麗な顔立ちをしていた。

時哉　そう呼んだ少年より僅かに短い髪を二つに縛ったツインテール。スポーツ少女のような健康的な肌。その印象を更に極めつける引き締まった身体。

誰の視点から見てもこの二人は吊り合っているようにしか見えな
い。芸能界からスカウトを受けても全然不思議ではない　むしろ
当然とも言える二人を前に、通り掛かった第三者は憧れや妬みの視
線を向け、素通りする者は何処にもいなかった。

軽快なステップで自分の前に立った少女に向かって少年は一声。

さきほどのような初々しいカップルが行う、そんな一声が、　会
話が　！

「んなこと分かってんだよ、このグズ」

「仕方ねーだろ！ こちとら転入したてで右も左も分かんないんだからなっ」

繰り返されなかった。少女も形の良い眉を吊り上げて怒鳴り返す。

「昼休みは四十五分あるんだからそんなとき誰かに案内してもらえばよかっただろーが」

「お前は昼休みを何だと思っている!？」

少女はビシツと指差した。

その答えについて時哉は「昼寝だろ」と返事をするつもりだったが、その前に少女は結論を出した。

「昼休みと言えば、例えそれが転入生であったとしても『遊び』のひとつだけだろ！ それこそがたったひとつの真実だろ！」

「……………」

時哉は思い切り顔を顰めた。

この時哉という少年。今年で十七を迎える少年は、クールというか極度の面倒臭がりだった。

居眠り大好き。怠惰大好き。面倒事嫌い。事勿れ主義。皮肉屋。サディスト。

軽くはない。チャラ男ではないのだが……

ぶっちゃけると性格は死亡していた。それはもう瓦礫のように崩れ去って原形を留めなくらいに死滅していた。

基本面倒事は嫌悪する嫌いにあるのだが、人を陥れるためなら努力を惜しまない。もう、本当にどうしようもない男なのだ。

そういうわけで現在、時哉は目の前にいる少女と不毛な会話を交わすことを避けたくて堪らなかった。

「……そうだな」

と、感情を押し殺して見せ掛けだけの同意をする。

「だろ。だからあたしは昼休み、ずっと体育館でバスケをやってたんだよ。あのときのサマーソルトダクシユートはYouTubeに投稿しても恥ずかしくない出来栄えだったと自負しているぜ」

「まあ、本当にできたんなら間違いなく神業だろーよ」

「本当だぞ。なんなら今から体育館で見せてやるっか？」

「結構だ。っーか部活中だろ」

耳を澄ませしてみると、活発な声が聞こえてくる。

グラウンドからは野球部の気合いと打球音。

体育館からはバスケットボール部のボールがバウンドする重低音。

更に校舎からは吹奏楽部が奏でる未熟な演奏が。

授業が終わったばかりだというのに佳境に入ったようなテンションの理由は何処の部活動も新入生を獲得しようと躍起になっているのだ。

「颯爽と現れて颯爽とサマーソルトダンクシュート決めて颯爽と去っていく。これめちゃくちゃ燃える展開だよな！」

「創作物ならな。リアルならただの痛いやつだ」

「何でそこで諦めんだよ！ もっと熱くなれよ！」

「それ、どこの修造さん？」

時哉は深い溜め息を着いて「めんどくせえ」と胸中で呻いた。

と、そのとき

「す、すみません。遅れました」

今度は疲労困憊が心地好いくらいに伝わる声がすんなりと耳朶を打つ。しかし鈴が音を奏でるような、それでいて儂げな美声だった。

とととて、と覚束ない足音で先にいた少女の隣に立つ。

その子は活発な印象の少女とは打って変わって儂げで独特な雰囲気があった。病的なまでに白い肌。その儂さはまるで触れれば枯れてしまいそうな一輪の花のよう。サラッと流れる金色の長髪と幼い顔立ちは時哉以上に、西洋の人形と近い造形で、護ってあげたく

なる、と性別問わずに思わせる魅力を放っていた。

確かに、そんな美少女だった。

だが、今は

「ぜえ……ぜえ……」

死にかけだった。

美少女とか関係なく顔を攪め、病的なまでに白い肌を真っ赤に染めて、大量の汗を流している。足は生まれ立ての小鹿のようにプルプル震え、軽くつついてしまうだけでコテンと転んでしまいそうに弱々しい。

「何で校門まで来るのに息切れしているんだ、お前」

「ま、迷ってしまいました……」

「迷うほど広いか？ この校舎」

時哉は校舎を見上げた。

確かにこの文月学園はとあるシステムの試験校だけあって学費は安いながらも大規模であった。二年生からはクラスがA〜Fにまで膨れ上がるし、上位成績者が集まる教室なら、その広さは体育館ほどにある。

しかし迷うほどだろうか？

(つか、迷えるのか)

校舎というのはそもそも迷えるような構造にはなっていない。窓から顔を覗けば見取り図だって作成可能なはずだ。

と、そこで時哉は少女の目が泳いでいることに気付く。

わしっ。

「にゃ!?!」

遠慮なく少女の顔面を鷲掴む。それも腕に血管が浮かぶほど強く。

「言ってみな。正直に」

「PSPのゲームをやってみました! ごめんなさいです!」

「よし、潰すか。トマトのように」

「正直に言いましたよ!?!」

「正直に言えば助ける、と誰が言ったかな?」

時哉は口角を吊り上げる。

ニヤリと、形の良い唇を歪めるその様を少女は指の隙間から見た。

「お、鬼です! 悪魔ですー!」

「確かに俺はお前のお兄(鬼)だが……。あ、熊です(悪魔)って

熊が何処にいんだよ。さては怪しい薬でもやってるな」

「百パーセント言葉の意味理解して言ってますよね！ 悪意しか感じられないですー！」

「これが俺のコミュニケーション」

「改める気は？」

「お前は廃人を改める気はあるか？」

「いえ、これぼっちも」

少女は即答した。認めてはならない単語が浮き出たが、否定せず、少女は頷いた。

「つまり　そう言うことだ」

「なるほど。では仕方ないですね　って丸め込まれました！」

「単細胞確定おめでとう」

「こんな喜べない祝福は初めてですよー！」

「ところでさっきから吠えてばかりで疲れねーか」

「誰のせいとされているですかああああーッッッ！！」

「俺」

時哉は打てば響くような返答をあっさりとする。

すると隣にいる活発的な少女が、

「叫びのツッコミってあっさり返されると恥ずいよな」

「そう俺も結論出したから辱めてみた」

更に追い打ちをかけた。叫びのツッコミの後に冷静な会話ほど嫌らしく恥ずかしいものはない。

実際に少女は羞恥に顔を朱く染めてプルプル震えている。

俯いて、よく見えないが金髪の間隙から覗く瞳には涙が浮かんでいる。

「後、一押しか」

それを見て時哉は頷いた。

「普通、半泣き状態なのを視覚したらやめますよね……」

真冬はガクツと肩を落として呻く。

「もっと苦しめ」

「何処まで鬼畜なんですか！」

「知りたいのか？ 知ればこれからの生活、一挙手一投足さえもビクビクして精神を擦り減らし、大好きな趣味に打ち込む瞬間すら俺

の顔がちらつきガクガク震えて集中できず、学校にいる時でさえ休憩中は気を抜けない、そんな、まるで生きた心地のしないような日常を過ごすことになるかもしれんが、それでもいいのか？」

「け、結構です」

少女は蒼白の顔で拒否をした。

どうせ、ろくでもないことばかりの真っ黒とした陰険な語りが長時間続くだけなのだ。それはもう、昼ドラの愛憎入り混じったドロドロのようじに。

聞けば鬱になるというデメリットしか残らないのに誰が好んで聞くというのか。

怖いもの見たさの行動がプラスに働くことは稀有なのだ。

すると、活発的な少女が唐突にクスツと笑みを零した。

二人は一旦会話を打ち切って視線を向ける。

「元々おかしかったネジが遂に外れたか？」

「どうしたの？ お姉ちゃん」

「いや、二週間前まではこんな風になるだなんて思ってなかったからな」

活発な少女は感慨深げに二人を見詰める。

「まあ……」

「そうだよね」

続いて二人も、今と昔の違いを実感して同様の感情を抱いた。

そう、出会いは二週間前。

二週間前の春休み。

三人は兄妹になった。

第一話 ？（前書き）

原作キャラはまだ出て来ません。

第一話 ？

春休み。

それは四月を年度の始まりとみなす日本では年度の境目であり、年度の終了、または年度の始めの準備期間としての意義がある。企業の年度替わりの事情から大規模な人事異動が行われることも多く、引越しの需要が多い期間でもある。なお引越等をしなないものにとつては文字通り春季の休業となり、この時期に春という季節を充分に味わうことができるのだ。

織部時哉も、その春休みを満喫していた。

ふかふかなベッドに横向けに身を預け、布団をすっぽり被って微睡みの中にあつた。

カーテンの隙間から差し込む春の麗らかな陽気が彼の眠気を誘発する。

「春休み……神だな」

普段は「怠い」「眠い」くらい多様されない横一文字に閉じられた口が今は柔らかな弧を描いている。

時計の針はすでに十二時を指していたが、まだまだ起きる気配はない。

「……………これなら長年の夢だって叶う……………。一日で五十時間睡眠……………。大丈夫、俺ならできる……………」

現実的には不可能な現象だが、それを切に願うくらい彼は居眠りが大好きで怠け者だった。

つまり時哉は最低でも後一日半ほどは食事もせず布団の中にいるという。誰が聞いて呆れる怠けっぷりであった。

「……………欠伸が止まん。……………これはいつものことか」

無駄に整った顔を遠慮なく歪め、大きな欠伸を連発した。また一発かましてはより強い眠気の誘いが襲う。

「寝過ぎは身体に悪いと言われっけど、全然そんなことないよな……………。お眠り様が毒なわけがない……………うん、居眠り神は最高神なんだ……………オー Dein 乙……………」

そう言って意識をシャットダウンさせようとする。

布団をすっぽり頭まで被り、外界の光を完全に遮断すること数秒……………。

「ZZZZ……………」

なんて分かりやすい表現を用いて時哉は、崇拜し、愛してやまない眠りの世界へ足を踏み入れた。

と、思いきや

「お兄ちゃん、いい加減起きなさい！」

部屋の外から怒号が上がった。しかし、調律の取れた、木管楽器のように透き通った美しいソプラノである。

廊下を乱暴に叩く音が徐々に近付き、遂に扉が開け放たれた。

現れたのは一人の少女。

輝く滝のように白銀の長髪は癖一つなく背中まで流れる。海を思わせる深いアクアマリンの瞳はパツチリと大きく開いている。新雪で傷一つない柔らかな肌は触れることすら躊躇うくらいに美しい。

” 絶世 ” の二文字がすんなりと馴染む美少女だった。

そして信じられないくらいに時哉と同じ容姿だった。違う点を挙げるなら、少女は時哉のように陽光を受ければ仄かな紫陽花色に変色する特殊な銀髪ではなかった。

そして瞳。時哉が横長に細く、吊り上がった、しかし眠そうなアメジストに対して少女は縦長にぱっちり開かれた、輝きの強いアクアマリン。

最後に身長。時哉は年相応より少し高めだが、少女は時哉の胸までもない。大分小柄で華奢な身体をしていた。

お兄ちゃん。そう呼んで決定打。二人は血の繋がった兄妹なのだ。

少女は柔らかく吸い付くような頬を風船のように膨らませてもう一度兄の起床を促す。

「お兄ちゃん！ もうお昼過ぎてるんだよ！」

「……………」

「起〜き〜て〜！」

「……………。…………返事がない、ただの居眠り神信者のようだ」

布団の中から帰ってきた言葉はそんなふざけた内容だった。

ムカツと少女は眉根を吊り上げる。

「居眠り神信者つなに!？」

「…………最高神」

「それオーデイン」

「…………そいつ乙った」

「乙ってないよ」

「…………居眠り神様に転職したらしい」

「神様って転職できるんだね」

と、くだらない話はこのままでにして少女は無慈悲に布団を剥ぎ取った。

ぶわつと布団が舞って、時哉のスリーピング世界は終わりを告げた。外界と触れ合ったことで閉じた瞼の中で赤が広がる。

あまりの眩しさに顔を顰め、布団を手探りで見付だそうとするも、彼の手が届く範囲に布団はない。

時哉は仕方なし、と俯せになった。

「だから起きてっばー」

まるでそんな気配を見せない怠惰の権化な兄に、しかし少女は諦めず今度は脱力しきった時哉の身体を揺さ振る。

「……優姫。兄はあと三十九時間は寝続けないと身体が干からびるんだ。だから……」

が、妹　優姫ユウヒが遮って

「逆だよ！ そんなに寝続ける方が干からびるからっ」

「……そんなわけ」

「居眠り神は幻想！ いいから早く起きるー！」

優姫は時哉の肩と横腹を抑えて「ん〜」とひっくり返し、陽光を注いだ。

「……眩しい。死ぬ」

「ゾンビじゃないんだから」

そう言って時哉の両頬に手を当ててこねこねとこねる。とにかくこれ以上寝かすつもりは欠片も存在しないようだ。

このまま睡眠と起床の半端な攻防を続けるのは居眠り神様に失礼だと、理解不能の領域に至った時哉は苛立ちを隠さずに上半身を起こした。

「おそよう、お兄ちゃん。たまにはおはようって言ってみたいな」

「俺に、死ねと？」

「その結論に至るお兄ちゃんが分からない」

「その結論に至れない妹が分からない」

二人は同時にかぶりを振った。しかもお互いがお互いを哀れんで、実に不毛である。

「で、何の用なんだ？ 俺はまだまだ寝足りないんだが」

「軽く十二時間は越えた睡眠を取って何言ってるの」

額に手を当てて、優姫は深い溜め息をつく。その溜め息は彼女のお馴染みと言っていていくらい慣れ親しんで、重みがあった。

「用はないよ。ただ、これ以上寝続けると学校が始まってもし起きられなくなっちゃうから」

「起きれるから寝かせろ」

「神に誓って言える？」

「おう」

「居眠り神様に誓って言える？」

「な!？」

時哉は眠たげな眼差しをカツと見開いた。

宗教に興味なんてないから神なら適当に返答しておけばいい。別に崇拜なんてしちやいないし、信じるつもりだって微塵もない。だが、居眠り神様となれば話は別だ。次元単位で別だ。

「それが人間のする所業か……!？」

「つまり起きるつもりはさらさらないってことだね。もうダメッ。寝かせないからね」

優姫は自分の長い銀髪を手櫛で後ろに流して時哉をベッドから引っ張り出した。

「このミニマムの何処にそんな力が」

「ミニミニマムじゃないもん！」

顔を真っ赤にさせて優姫は憤慨した。

「ミニマムだろ。今年度から高校生になるってのに身長が百三十七

ンチもないって、どういことだよ」

あゝ、かったりい、と呟きつつ時哉は気怠げに立ち上がる。極度の面倒臭がりの彼であるが、異常に整った容姿を生まれながらに持つたので一応身なりには気を遣っている。手で、絡まった髪を直し、猫背にならないよう背筋を伸ばした。

そして改めて妹の優姫を見る。

自分とほぼ全く同じの均整の取れた顔立ちと華奢な身体。今、優姫はカジュアルな服装をしているが、フリルのついた服を着れば本当に西洋の人形と見間違えそうだ。

が、それ以上に時哉の視線が向いたのは、一歳しか違わないにも関わらず小学校低学年で成長が止まってしまった残念な身長。

それに気付いた優姫は羞恥にまた顔を紅潮させ、俯いた。

「うう……毎日、牛乳瓶三本も飲んでいるのに……。骨ばっかりが丈夫になっていくよ」

「ごく一部から受容はあるんじゃないの」

「私は普通の人と普通の恋愛がしたいのっ!」

「はっはっは」

それは抑揚のない乾いた声だった。

「何で笑うの!?!」

「まだそんな淡い幻想を抱いていたんだな、と」

「はうッ」

雷鳴に打たれたような衝撃を受けて優姫はふらついた。

時哉の記憶では、確か優姫は今まで数人の男子と付き合っていたことはあったけども、どいつも善人を被ったただの変態だったはず。結局キス一つできず、数日も経たずして破局の連続だったらしい。

「お前、男運悪すぎ」

「……家族も含めてね」

「否定はしない」

「しないんだ」

「天は二物を与えずと言うが、俺は容姿だけに全てを詰め込まれたような。それ以外取り柄はないのだ」

「直せばいいと思うよ」

「面倒臭いから無理」

と、言いつつ時哉は優姫を見下ろす。

さきほどから返事が坦々としたものになって実につまらない。

自他共に認める男運の悪さに心底絶望しているのだ。

(どうしたもんか)

天を仰ぎ、時哉は今までこういった場面をどう凌いできたのかを探る。即座にやめた。面倒臭かった。

だが、指先一つ起動させるにも気怠さを覚える怠け者は、一応頑張った。

ベッドに隣接する小型のガラステーブルに置いてある飴玉を一つ取って、開封すると黙って優姫の薄桃色の唇に押し付けた。

「んうっ」

ふにゅんと柔らかな唇の感触と微かな吐息が指先に伝わる。

が、無反応。

「面倒臭いが、とりあえず元気出せ」

平淡な声でそれだけ告げると時哉はゆったりとした足取りで部屋を出た。

「顔洗うか……ねむ……」

腕を伸ばしながら盛大な欠伸をかいていると、数分前に聞いた廊下を蹴る音が、今度は自室から聞こえた。

もちろんそれは優姫のもので、瞬間、激しい衝撃を背後に受けた。

「おい」

感触で優姫が飛び付いて来たのは分かるが、その衝撃に耐えるほどの力をこの怠惰の権化が、咄嗟に入れるわけもなく、

バタツと情けなく彼は転倒した。

「……おい」

床と触れ合いながら時哉は不機嫌な声を上げた。

しかし優姫は全く気にした様子なく、

「えへ」

と、なぜか上機嫌で背中を頬擦りしていた。

「だからお兄ちゃん、大好きなんだよ」

主語の抜けた言葉を時哉が理解できるはずもなく、妹の無邪気な笑顔を受けていつも通り無気力になった。

どうやら彼は跳ね退ける、なんて力技すら面倒臭がるようだ。

第一話 ？

キッチンに立った優姫は口内に残る飴玉を舌でころころ転がしつつ、調理器材を収納ボックスから取り出した。

「お兄ちゃん、何が食べたい？」

上機嫌に、そう聞いた。中空に音符を浮かべてそうなくらいに彼女がご機嫌だった。

優姫は兄とは違い、しつかり者で唯一の常識人であるが、若干ブラコンの成分が混成されている。普段は面倒臭い、土壇場でも面倒臭い、修羅場でも面倒臭い、どんな場面でも面倒臭いと公言してならない兄を慕う理由は検索するに数十分は軽く有するのだが、それでも兄が好きだった。さきほどしようもない理由で落ち込んでいた自分を、面倒臭そうな顔を見せつつも小さな気遣いをしてくれる兄が好きだった。

ニコニコ顔の優姫と打って変わり、兄の時哉はいつも通りの無気力フェイスのままである。

だらしない体勢でソファーに身を預け、ブーツと天井を見詰めていた時哉は一言。

「任せる」

何が食べたいか考えることも面倒臭かったのだろうか。

「炒飯でいい？」

「ん」

「すぐに取り掛かるね」

優姫は冷蔵庫から卵を取り出して早速作業に取り掛かった。

五分もしないうちに完成した炒飯をダイニングテーブルまで運び、コップにお茶を注ぐ。

「できたよ」

「了解」

時哉は重い腰を上げて椅子まで移動する。

椅子に座り、スプーンを手にすると、時哉は気付いた。テーブルには一皿しか乗っていない。

「優姫。自分のは作ってないのか？」

時哉は優姫を見る。

「私はもう食べたよ」

「ああ、なるほど」

向かいに腰を下ろした優姫に相槌を打って食事を始める。炒飯の

素を使用した簡素な料理なので本場には遠く及ばないが、それでも立派な市販品。文句を付ける部分はない。

「美味しい？」

「普通」

「そんなもんだよねー。裏面に書いてある調理法のままに作ったから」

優姫は平然と返した。

「この場合『美味しい』とか言わないと勝手にキレル女って結構いるよな」

想像ではなく実体験なのか妙に現実感を感じた霧困気で、時哉はうんざりした様子で息を吐き、頬杖を着いた。

それを聞いて優姫は苦笑する。以前、知り合いが自分にぶちまけた内容が「私の彼ったら酷いのよ！ 私が一生懸命作った手料理を食べて『マズッ！死ぬ！』って目の前で吐いたの！ そりゃ……カレーなのに、どうしてか色は紫だったけど　でも！　でも、吐き捨てるって酷くない！？」と、まさにキレル女だったのだ。

そんな会話があったことを伝えると案の定、時哉は更に顔を顰める。

「紫のカレー……。むしろ一口でも食った彼氏を褒めたたえるべきじゃないか？」

「私もそう思う。あの時は『そ、そうだね。酷いよねー……。あ……あは、あははははは……』って返したけど、彼氏さんの無謀とも呼べるけど確かな勇氣に心の中で敬礼した」

顔も名前すらも知らない男に胸を打たれた瞬間だったという。

優姫はその絶世と呼べる容姿から恋愛関係において豊富と認識され、そういった相談や悩みを聞かされていた。実際は片指で数えられる程度だし、キスへの道のりを歩く前に全てが破局しているから、全然豊富ではないのだ。

彼氏との悩みは適当に相槌を打っておいた。

恋愛の相談も当たり障りのない助言を与えているだけだ。

それでもあの『優姫』に悩みや相談を持っていったからそのものたちは絶対的な自信や安堵を手土産にできる。特に彼氏とのいざこざはただその子が誰かに話して、ストレス解消をしたいだけなので、ウンウンと頷いておけば相手は満足なのだ。

優姫からしてみれば迷惑この上ないが、無下に断ることも性格上不可能だった。

悩みor相談 内心びくびくしつつ解決 疲労度up 悩みor相談 内心びくびくしつつ解決 疲労度up そんな悪循環が今も続いているのだ。

「年頃の女の子って面倒臭いなあ」

優姫は肩を落として深い溜め息を着く。

言葉から察するようには優姫自身、最近そう言った悪循環が続くものだから恋愛にも辟易しつつあった。付き合いも自然と浅いものへと変わり、この春休み、友達と遊ぶ予定は一日も無かった。

「お兄ちゃんじゃないけど、面倒臭いなあ」

もう一度溜め息を着くと、脱力してテーブルの上につ伏した。

絶世の美兄妹は揃ってやる気をなくして怠けきっていた。

「何か、ここいらで心機一転な出来事がないと、私もお兄ちゃんみたいになっちゃいそうだよ……」

「甘くみるな。お前が俺みたいになるには最低五年は必要だ」

「わ〜い……それって凄いダメダメってことだよな。今みたいな長期休暇に出される宿題は最後の一日に完徹する　みたいなの？」

覇気も抑揚のない完全な棒読み状態。兄が自称する気力欠乏症に優姫までも掛かってしまいそうである。

「だから甘いんだよ優姫は。俺クラスになると最後の一日にすらも宿題はしない。教師に怒鳴られようとも、成績が下がろうとも、俺は宿題は絶対にせん……！」

ただのクズである。

「あゝ、確かに私には無理かな。私、長期休暇になる前に宿題は終わらせるから」

事実、この春休みに出された宿題も終業式のあった日に終わらせていた。

今はいろいろナーバスになっているせいで本来の気質が失われているが、織部優姫は立派な常識人でかなりのしつかり者だ。規則正しい生活を送り、墮落しきった兄を何とかしようと常に奮闘している健気な少女なのだ。

そんな少女を救うように、テーブルに置いてある子機が鳴り始めた。

「うるせえ」

「うるさい」

悪態を着きながらも優姫は子機を取る。ボタンを押す前に姿勢を正し、コホンと声の音調を確かめる。

「はい、織部です」

ナーバスといってもやはり常識人。透き通るように綺麗な声で対応した。

『たわしだ』

「あ、お父さん」

その声は兄と同じくらい聞き親しんだものだった。意味不明な発言も、むしろ拍車になっていた。

事実を告げることが許されず、受話器から聞こえる謎の奇声。のたうちまわるような、苦痛を帯びた魂からの叫び。

その大音量は優姫の鼓膜を刺激した。キンキンとする耳を抑えて受話器から距離を取る

安全圏に入ってから時哉を見て一言。

「お父さん壊れた」

「元からだろ」

「そうだけど　また一層壊れた」

「……あれ以上だと？」

「朝、人の写真を貼付けたベニヤ板と喧嘩してたけど……もしかしたらあれ以上かも」

「ウザいな」

「うん。果てしなくウザいよ」

父親の頭にお花畑が広がっていることは充分承知していたし、面白かったから嚴重注意はしなかったのだが、まさかその甘さがこんな事態を引き起こすとは。

二人は揃って溜め息を着いた。

「で？ まだ壊れているのか？」

「奇声は止んだかも」

受話器から音が止まったのを確認してから優姫は反対側の耳に受話器を持っていく。先と同じ轍は踏まず、受話器は耳から離れていく。

「お父さん……？」

恐る恐る、声を振り絞る。

だが、反応はなし。

「お父さん？」

今度はハッキリと呼んだ。

すると暫くの沈黙を置いてようやく受話器が応えた。

『いや、悪い悪い。ちよつと十万ボルトの電撃を受けてな』

「「なぜ生きてるし」「

咄嗟にそう突っ込んだ。そう突っ込まざるおえなかった。そもそも、なぜ十分ボルトの電撃を受けたのだろう。ピッ ピカチュウ。

しかし父親はそんな子供二人の疑問を解消することなく、

『時哉もいたのか。ならちようどいい』

「遺言か？ 全財産俺に寄越せよ。逝ってよし」

「だって」

良心の一寸片たりとも存在しない我欲にまみれた腐兄の言葉を一字一句抜からず修正なしに伝えて、

「私にも半分ちよーだいね」

『優姫ちゃあああん！？』

「冗談だって。それで、何がちょうど良かったの？」

断末魔にも似た絶叫を上げる父親の姿を思い浮かべながら、優姫は苦笑した。毎度毎度馬鹿発言と馬鹿行動を繰り返す精神未発達の父の情けない姿なんて哀れにも一瞬で浮かび上がった。

『ああ、実はな……』

ちょうど良かった、と言っておきながら、途端に歯切れが悪くなる。受話器から呻き声が数秒続き、そしてようやく紡がれた言葉は、

『お父さん、再婚することになりました』

「……………は？」

第一話？（前書き）

長くなりそうなので一旦、区切ります。自宅で何があったかは次回に

第一話 ？

春休みは当然ながら三月下旬から四月上旬の約二週間にあり、山から舞い降りる風は少し寒風を残していた。

その春風未満の風に乗って、はらはらと薄桃色の花弁が舞い落ちる。

近くの公園にどっしりと根を生やし繚乱と咲き誇る桜の大樹から踊ってきたのだろう。莊嚴な姿には似合わない風情の彩りは、しかし美しく幻想的な光景だった。散るからこそ、桜の花は美しいのだ。

時哉はその様を

「うつげえ……」

鬱陶しげに顔を顰めて憎らしく呟いた。

どうやら彼にとって蒼穹に舞う桜の花弁はただの視界の障害にしかならないらしい。いつも通り、幼稚園児が初めて三輪車に乗った速度に匹敵する足取りで住宅街をとるとる歩く。

その最中にすれ違った男女は時哉の均整の取れた顔立ちとサラッと流れる紫陽花色を毛先に僅かに帯びた銀髪を見て、羨望や嫉妬の眼差しを向ける。

しかし時哉は気付くことはなかった。両者共にそれは僥倖だった

言えよう。もし気付いてしまえば時哉は間違いなく「ハッ」と鼻を鳴らし、連中を見下して嘲笑う。そうやって人をおちよくるのだ。

「あゝ、歩くの怠い。自転車が欲しい……いや、でも漕ぐの面倒臭いな。ならバイクか……あー、でも買いに行くのもしんどいな。そんな金ねーけど……」

あー、怠い。とにかく怠い。果てしなく怠い。寝たい。眠りたい。睡眠したい。眠り神様に会いたい。なんて、まるで呪文のようになり返しながら目的地に辿り着いた。

そこは軒並みの一つ。何の変哲もない一軒家だ。小さくもなく大きくもない。塀に囲まれ、入口から覗く庭は綺麗に手入れをされて春の花が咲いていた。

『木下』と書かれた表札を認めて時哉は塀を抜け、インターホンを押した。

「はい」

と、返事がして数秒後。小走りする足音が徐々に近付いて扉が開いた。

「お待たせしました」

人当たりの良い笑顔で現れたのは同年代の少女。肩に掛かるくらいの茶髪、その前髪はピンセットを使って横に流している。容姿は、文句なく整っていた。

「あ」

少女は時哉を認識すると、素っ頓狂の声を上げた。

そんな少女に時哉は、なぜかガツカリした様子で呟く。

「なんだ。魅力に欠ける姉のほうか」

少女も、

「なんだ。腐り果てた兄のほうか」

売り言葉に買い言葉。お互い罵り合って火花を散らす。

「BL。魅力に富んだ弟のほうはどうした」

「廃人。常識に長けた妹のほうはどうしたのよ」

「……………」

火花は消え、周囲の空気が不穏で氷点下の域にまで達する。先に視線を外したほうが負け、とばかりに両者一歩も譲らず炯眼を向け続けた。

「優姫は今、肩と頬に携帯を挟んで温めている最中だ」

「秀吉は今、部活動に行ってるわ」

「あの演劇マニアめ。肝心な時に」

意識の矛先が少女 木下優子の弟、秀吉に向いたことで両者の

不穏な空気はとりあえず取り除かれた。

「またアンタの家で不祥事？」

優子は呆れて肩を竦めた。

「今回は優姫と馬鹿親父だ。そろそろあの馬鹿が覚悟決めて優姫のコールに出るだろうから」

「優姫の怒鳴り声で安眠妨害を恐れたアンタはこっちに来た、と」

「もう、かなり遠くてしんどかったぞ」

気怠げな息を吐く。全身からほとばしるやる気のなさは（ないものをほとばしらせるほど）触れるものすべてを安眠の世界に誘う魔力を秘めていた。

如何にもマラソンを完走したランナーのように燃え尽きた表情の時哉に、優子は半眼を向ける。

「徒歩約一分の距離で何言ってるのよ。アンタの家、外に出れば普通に視界に収まるくらい近場にあるじゃない」

「歩くっていう行為が怠いんだよ。道端にも空港みたいにコンベア付けてくんねーかな」

「……冗談でしょ？」

「割と本気だが」

あっさり認める。

優子は額に手を当てて、悲しげにかぶりを振った。

「ありえない。悪化してる。悪化しているわ。現在進行形で怠惰の汚染率が上昇しているなんて信じられない」

「まあ、細かいことは気にするな」

「アンタは気にしなさいよ！」

「喜ばばいいんだな」

「悲観するべきよ！」

「そんなことすれば俺の中の大切なモンが砕け散ってしまうだろう」
「よ」

「砕け散りなさい！ 一度粉々に砕いて最初から組み立てなさい！」

「嫌だよ面倒臭い。組み立ててる？ なにその面倒臭過ぎる言葉。俺、プラモとか工芸の楽しさ全然分からねーのですけど」

「もー駄目だ、こいつ。とにかく駄目だ、こいつ。ありえないくらいに駄目だ、こいつ。どれくらい駄目ですって？ どうしようもなく駄目よ、こいつ」

今の自分にまるで疑問も不満さえも抱いてない怠け者はそんな駄目を連発されても動じない。人間、堕ちるとここまで堕ちれば、その過程で修正しようとする者との奮闘で自然と耐性がつくのだろうか。

人の話を聞かなければ、こうなる、のまさに集大成が幼なじみにいる現実に優子は絶望した。いや、薄々気付いていたのだがその頃から手遅れだったのだ。なぜなら彼は赤子の頃から眠たげな眼差しを滅多に開花しないのだから。

「修正が不可能と理解したところであげてくれまいか」

馬鹿な教え子が内容を理解してくれた瞬間の教師のような反応を見せる時哉に、優子はイラツと眉間に皺を寄せたが、このまま玄関に立ち続けるのもあれなので怒りを堪える。

「いいわよ。秀吉の部屋なら自由に使っていいから」

「あざーす」

心にもないことを言って時哉は木下家に足を踏み入れる。

「感謝がまるで伝わってこないんだけど」

特に気にしてないのだが、とりあえず性質ながらにツッコミを入れる。

時哉はそれに一言。

「キャラを考えろ」

激しく頷けた。

「そうね。アンタが抱き枕や安眠枕をプレゼントされた時以外に感

謝の意を述べるなんて気持ち悪くて仕方ないわ」

もし、そんな幻想が現実になればあまりの悍ましさに身は震え、込み上げる吐き気は尋常なものではない。もしかすると吐き気を通り越して刹那に嘔吐する可能性だってある。人として、そんな姿は避けたいものだ。

「もう怠けきつた時哉に慣れ過ぎたから、まともな人格の時哉は、想像するだけでキツイものがあるわね」

「安心しろ。絶対にありえないから」

人は怠けながらも「こうしたい」とか「ああしたい」という願いを原動力にして前に進んでいるし、進みたいと思っているものだが時哉はまったくの例外だった。

彼は怠けながら「更に怠けたい」と思っている、本当にもういろいろ終わっている男だった。

時哉は階段を上がりつつ後ろに着く優子を横目で見る。

「お前の本性も、学園にいる連中からみればかなりキツイがな」

反論しようのない正論に優子は「う……」とたじろぐ。

木下優子は文月学園において優等生として認識されている。

容姿端麗、頭脳明晰、常に質実で人当たりの良く、校則違反を決してしないその様は教師の求める理想な生徒を絵に描いたかのようで、「木下優子を見習え」と教師は語り、「木下優子に相談しよう」と生徒は頼る。それくらい高い信頼を獲得しているのだ。

しかし残念なことに、時哉の時と同様に現実には残酷だった。

綺麗な薔薇にはいつだって刺がある。

その、非の打ち所のない完璧超人のような姿は仮の姿　ただ猫を被っているだけ。

その本性は時哉に似てズボラで弟の秀吉へ折檻する際には関節を真逆の方向へ捻曲げたり、外したりとかなりバイオレンス。そして時哉が彼女の名をB Lと称したように隠れ腐女子である。

確かに、模範的な生徒が実はこんなだった、と知れ渡るとキツイものがある。今まで築き上げたお互いのあらゆるものが一瞬で砕け散るのだから。

「分かっていると思うけど、ばらしたら絶対に許さないわよ」

「しねーって、面倒臭い」

と、言って優子が聞き取り切れないポリウムでボソツと呟く。

「切り札は置いておかないとな」

「何か言った？」

「いや、なんも。それより、優姫も今年から文月学園に通うから釘刺しといたほうがいいぞ。お前が優等生演じてるなんて知らないはずだからな」

春休みが終わり、二度目の春を文月学園で迎えると、優姫も新生として文月学園の一生徒になる。その時、学園での優子を知らずにいるとうっかり　そしてアポーンで可能性も拭えない。

「ならアンタから言っておいてよ」

「面倒臭い」

「……………」

「分かった。伝えておくから俺の手首から手を離せ。関節技を決めようとしているその手を離せ」

春は麗らかな陽気に満ちており最もこの男が活動しない季節だ。

眠りの春とは気力欠乏症が濃く現れるとは彼の弁。

抵抗することすら面倒臭いのだ。

手首が自由になると疲れたように息を吐いて二階に上がり、秀吉の部屋を開け放った。

部屋はキッチンと整理整頓されており、芳香スプレーを使用しているのか甘い香が漂っている。

「最適だな」

眠るには。

時哉は満足げに頷いて綺麗に敷かれたベッドへと即座に身を預ける。窓から差し込む陽射しを受けてベッドはポカポカしていた。

「聖地だ」

カーテンを閉めて、心地よさげな息を漏らす。

顔を枕に埋めて寝返りを打つ。

そして気付く。

「何でお前もここにいるわけ？」

なぜか優子まで秀吉の部屋に入り、ベッドを背もたれにして小説（おそらくBL）を読もうとしていたのだ。

優子は小説を捲りながら顔を上げる。

その表情には、好いた男と共に時間を過ごしたい、と仄かに想いを馳せる少女特有の

「あー。あれよ、あれ。アンタって怠けに怠けきつて基本、自分から他人に干渉して来ないでしょ。誰かと共にいるほうがいろいろ良い傾向にあるっぽいから、だから同じ空間を静かに共有するには持つてこいなよね」

ということとはまったくなかった。

要は心的に一人より二人がいい。だが静かに読書や勉強に集中したい。そんなとき、滅多に他人に干渉して来ず、煩くもないこの男は確かに打ってつけの逸材だ。

優子は時哉の有効的な使い方を理解していた。時哉の、容姿を除

いて唯一と呼べる良い部分を的確に見抜いていたのだ。

「だから私のことは気にしなくていいわよ」

そう言つと優子は読書に入った。

第一話 ？

時哉は利用されたことに納得のいかない表情を浮かべたが、その不満が睡魔に打ち勝てるわけもなく、怠……と呟いて全身を弛緩させた。

津波となつて押し寄せる睡魔が彼を押し潰す。口を開ければ出るのは欠伸。

あと少し。あと少しで時哉は完全に睡魔に飲み込まれる。

三、二、一、

「そういえば時哉」

「ああ……！？」

低く、腹の底から唸る険悪な声。

「ちよ、不機嫌になりすぎでしょ」

「うるせえ、黙れ、死ね」

刹那の差で居眠りを妨害された時哉はこれ以上ないくらい機嫌を損ねた。彼の中で幸福ランキングがぶつちぎりで頂きに構えている眠りを邪魔されたのだから当然とも言えるが。

吐き出した暴言の嵐を浴びせられ、優子は一瞬シバき倒してやるうかと思っただが、時哉は不機嫌になると口が悪くなる傾向にあるのを知っていたし、その不機嫌の原因を作ったのは自分であるため、玄関扉の時同様に怒りを飲み込んだ。

「春休み前にテストあったでしょ。あの振り分け試験の」

「あつたが、それがどうした？ 今は睡眠妨害をしたお前をどう痛み付けてやるうか悩んでいるんだ」

「やめなさい」

「一、顔面グーパーン。二、鳩尾グーパーン。三、眼球デコピン、四、精神的凌辱」

どれも録でもないことばかりだ。

「だからやめなさいって！」

優子は嫌な汗を頬まで流す。このダメ男は女だろうが一切の躊躇を見せない冷血人間なのだ。

「俺としては一から四の全部とB L本の焼却が好ましいんだが」

「あ、悪魔だわ……。特に後者なんて公開処刑とほぼ同じじゃない」

どうやら優子にとっては、一から四、までの暴力より宝物（B L本）滅殺のほうが圧倒的にダメージを受けるらしい。

彼女も彼女でいろいろと末期である。

「処刑か」

そう呟いて時哉は天を仰ぐ。

不吉としか言いようのない言葉に、しかし縁があるかのように達観した眼差しで、

「人間誰しもが一度は通りたいと思える道だよな」

「アンタの常識はいつもおかしい！」

「人を苦しむ姿を見るのって楽しいだろ。あの必死に頑張ってるのを演出してる様なんて特に」

「全然楽しくないわよ！　どんだけ尖った見方してるわけ！？　お腹の中、真っ黒じゃない！」

「『やらずに後悔するよるくらいなら、やって後悔するほうがいい』的な箴言あるだろ？　あれ、意味分かんねーだよな。どっち道後悔するんなら、やらないほうがいいに決まってんだろ。面倒臭いし、無駄な努力なんだから」

「謝りなさい！　箴言を説いた人とその台詞を使ったキャラたちに謝りなさい！」

「キャラ……この腐女子がっ」

明かなに不要だった一言をつまみ、時哉はハッと鼻で笑い、吐き捨てるように言った。

他人の趣味に興味を持つ、なんて面倒臭い感性を持たない時哉はソレについて嫌悪や侮蔑の感情は持ち合わせていない。ただ一般的にNGな趣味はおちよくなるための材料として使用するが、それだけだ。

自分の悦を満たすもの以外には興味を持たない、なんとも薄情な男である。まあ、だから悦を満たす際に起こす行動力は半端じゃないのだが、それはまた後の機会に。

「で、本題は何だったんだ？」

あからさまに面倒臭そうに、仰向けにした身体を横にして優子を見る。

ツッコミを続ける彼女はもう読書なんてせず、しっかりとこちらを見据えていた。もちろん顔には怒りを浮かべて。

「ちょっと待て！ どんなどころで脱線した路線の修正に入ってんのよ、アンタ！」

この腐女子がつ。そう言うてから修正に入ろうとしたから優子としてはさぞ納得のいかないことだろう。その罵倒から、きっと更なるコミカルが発生するはずだったのだから。

「はいはい、ワロスワロス。ならこれで文句ないだろ 閑話
休題」

「……………」

閑話休題。

「で、試験が何だった？」

「……全力で殴ってもいいかしら？」

「閑話休題使ったんだから前の話題を引っ張るなよ」

「く……後で覚えてなさいよ」

優等生とは到底思えない鬼のような形相で一睨み。

しかし時哉はまるで気にした様子なく飄々と受け流す。戦闘力がヤチャとフリ　ザくらい差があるのになんと豪胆なのか。

「じゃあ話を戻すわよ……腑に落ちないけど」

そう憎らしげに言って、

「振り分け試験、アンタどうだった？」

「できた、できてないの話か？」

「そうよ」

時哉は逡巡して、

「そもそも鉛筆握ったかねえ」

「へえ……。……。……。……。……。!? はあ
!?」

「反応遅え」

「ちょっと待ちなさいアンタ、馬鹿じゃないの？ ちょっと待ちなさいアンタ、馬鹿じゃないの？ ちょっと待ちなさいアンタ、馬鹿じゃないの？」

あまりにありえない発言に優子は驚愕に目を見開いた。テストの結果はまだ発表されていないが、自己評価くらいならできるはずだ。今回は調子良かった。調子悪かった、などいくらでも領けそうな言葉は見つかるはずだ。

が、この男の発言は「そっか」なんてのほほんと話していいレベルではなかった。

「鉛筆すら握ってないなんてどういふことよ」

「あ、いや、確か名前くらいは書いたわ」

「そついうことを聞いてんじゃないわよっ」

「だって書くの面倒臭いし。ほら、今の時代シャーペンなんかが流行ってるのに、いちいち押すのが面倒臭いっただけで鉛筆を使って……いや、所持してる俺なんだぞ」

つまり持っているだけで滅多に使わないのだ。

優子は激しく痛むであろう頭を押さえて「ありえない」とかぶりを振った。

「よく進学できたものだわ」

「ふっ。いろいろやったからな」

「……………」

含みある表情でクールに笑う時哉を半眼で見送る。正直に勉強したのか、それとも裏口入学か、それは本人のみの知るところ。

「じゃあFクラス決定じゃない。落ちこぼれの溜まり場よ、あそこ」

そこにはハッキリと侮蔑が現れていた。

優子は猫を被っていても優等生だ。Aクラスこそが学園の模範である、という高い理念を持っている彼女は間違いなく今年度はAクラスに所属するに違いない。

「どうせ秀吉もFなんでしょうし。ったくあの演劇バカは」

「忌ま忌ましげに唸る。」

優子にとって身内からFクラスが出ることは恥以外の何物でもなく、試験間近は秀吉にしっかりと注意を促していた。しかし出来栄を聞く限り芳しくなかったようなのだ。

「……………」

時哉は無感動に優子を見つめるだけ。

優子の考えや感情なんて（といか誰のでも）面倒臭くて知ったこつちやないのだ。敢えて追求するなら、ま、そりゃそうだろーな、が、答え。

そもそも優子の考え方は否定しようもない正論なのだ。

学生の本文は勉強。

生徒として絶対に違えてはならない教訓で、義務教育が終わって尚、学生であることを望んだのだから怠けるなんて以っての外。

友達と遊びたいのが本音なら学生なんてやめてしまえばいい。そんな気持ちを持つているのは真面目に努力する者の邪魔になり、嘲笑っているようにさえ映ってしまう。ましてやAクラスにいける学力を持つておきながらわざとテストで手を抜いて下位クラスに行くなんてAクラスを、努力した者たちを、見下して嘲笑っている以外の何物でもない。

優子がFクラスを見下しているのは、自身が本文である勉強への努力を決して怠らず、Fクラスにいく連中は授業中にすら遊び回る迷惑な存在が圧倒的に多いからだ。

才能ある者が才能ない者を見下すのとは違う。

努力した者と努力しない者。それは、それだけは、やるかやらないかの後天的なもの。

Fクラスにいく者に、努力しない者に、努力し続ける優子へ反発する権利なんてありはしないのだ。

「アンタは、ちゃんとテスト受けてればEかDにはいけたんじゃない？」

優子は呆れた視線を寄越す。

それに、時哉は不敵に笑った。

「甘いな、優子」

なんて言っつて、

「確かに俺は、先天的なもので高い知能指数を持ち合わせているらしい。が！」

カツ、と目を見開き、勢いをつける。

「この怠け癖も先天的な者！ つまり小学生の頃から怠け者の俺が勉強なんて一切するわけもない。よって、俺は今も昔も、そして未来でさえも、和差績商ていどしかできん！」

そう言った。

自信満々に、そう言った。

今年に入って初の熱を込めた発言だった。しかしそれはとんでもなく下らないもの。

自慢できる要素なんて、人に言える要素なんて、欠片すら含まれていなかった。

優子は遂に両手を抱えて、

「積の字が違うし……」

一瞬、本気で幼なじみの縁を切ろうかと思ったたそうなの。

第一話 ？

再度会話が途切れ、時哉がもつとも望んだ静寂が訪れる。

今回の静寂は長く続いていた。時計の針が半周しても、未だ破られることなく平穏な時が流れる。

素晴らしい時間だ。素晴らしく恵まれた環境だ。果てしなく眠気を誘う瞬間だ。

年がら年中眠気を携えていても、この春という季節は気温もさることながら、眠気を誘う固定観念も存在してより一層強い眠気が押し寄せてくる。

問題なんて何も無い。

いつも通り全身を弛緩させて目を閉じ、欠伸を二、三回すれば意識は闇に 否、至高の世界に辿り着けるはずだった。

「……………」

が、どうしてか目が冴えていた。ベッドに（というか何処だろうと）寝転べば欠伸一つくらい二秒もあれば充分だったのに、半時間が経過しても一行に欠伸は出て来ない。ゆっくり瞬きを繰り返して呆然と天井を眺めていた。そうしていればいつの間にか意識も途切れているだろうと淡い期待を抱いて弛緩させた身体に力はいれない。

実はその理由は分かっていた。目が冴えている理由は自分でも理解していた。

優子に眠りを邪魔される前までは頭に残っていた、”その理由”を彼女との漫才で掻き消すことに成功したのだが、邪魔されて以降は再び始まったコミカルシーンが原因で”その理由”が蘇ってしまったのだ。

時哉は薄く口角を吊り上げる。

優姫同様、自分も思っていた以上に気になっていたことが妙におかしかった。何でもないように振る舞っている自分が情けなく思えての自嘲だった。

振る舞う。自らを戒めるなんて面倒臭い行いをなぜ俺がしなければならんのだ。

時哉はそう思い、胸中に渦巻く霧を取り除くことにした。

「なあ、優子」

思わぬ問い掛けから優子は小説から目を離す。

「へ？ アンタ、まだ起きてたの？」

目を丸くして振り向いた。

「うわっ、珍し。槍でも振るんじゃないかしら」

「槍か。いいな、そしたら外出は必然的に出来なくなって退廃的な

日常が遅れる」

「大丈夫、アンタはいつだって退廃的よ」

「それなら安心だな」

と、言うて。

「馬鹿親父が再婚するつてよ」

さらつと爆弾発言をかました。

幼い頃からお互いの家を行き来していれば自然と家族とも交流する機会が訪れるものだ。優子は例に漏れず、時哉たちの父親とは知り合いだった。

ゆえにそんなことはしないだろうと、

「エイプリルフルは三日後よ」

「そこまで馬鹿じゃねーよ。残念だけど……まじ」

「……………まじ?」

時哉は深く首肯して、

「まじ」

「……………」

優子は空いた口が塞がらず、ピタリと硬直した。それでも何か言おうと口を必死に動かしているが、うまく声帯が機能してくれず、パクパクと動くだけ。驚愕に見開かれた目は揺れていた。

分かりやすい驚愕の表情を優子が浮かべてくれたおかげで時哉は幾分か胸中に渦巻く霧を取り除いて、表面上だけならず内面もなんとか落ち着けた。肺に溜まった空気をすべて吐き出しつつ半身を起こし、壁に背を預けて優子と向き合う。

「……面倒臭いよな」

息を深く吸い込んで、次は深く溜め息を着いた。

「そういうレベルじゃないでしょ！ ていうかちょっと待ちなさい！」

優子は頭痛を堪えるように、指先でこめかみを押さえた。精悍な顔立ちながらも情けない姿が似合う時哉父のアホ面が目には浮かぶ。

そのアホ面のまま引き起こしてくれた、数々の災厄　今回は最大級の災厄、

「もしかして優姫が和哉さんに怒鳴り散らしてるのって」

「これ。婚姻届も既に提出したらしくてな、優姫のヤツ、もうめっちゃ怒ってな」

「そりゃそうでしょ！ 怠惰野郎のアンタですら壊れて　いや、元々壊れているんだろっけど」

「おい」

「破滅の二乗ってるのに、優姫が『そうなんだ、おめでとう』なんて言えるわけないわよ」

「二乗ってる、って何」

「破滅×破滅〓絶滅よ」

「絶滅……」

果たしてこれは罵倒されているのか。

優子としてはそうなのかもしれないが、時哉はイマイチそれを中傷と捉えることはできず曖昧な表情を見せた。

「時哉自身はどう思ってるの？ 不調ってことは気になってはいるんでしょ。反対？ それとも賛成？」

そう問われて時哉は天を仰ぐ。

(どーなんかねえ)

反対……と、いうわけでもない。

賛成……と、いうわけでもない。

基準は面倒臭いか面倒臭くないか。今回のケースはどちらの部門に入るかと問われれば面倒臭いよ怠けたいよ部門にノミネートされ

る。

新しい家族なんて時哉からしてみればデメリットでしかない。現状の家庭に不満なんてないし、変化も望んではいなかった。今のままで文句なしの満足感を味わっていた。

環境が変われば雰囲気も変わる。新しい母親が生真面目なタイプなら時哉は退廃的な日常を過ごせなくなる可能性だってあるし、折り合いが合わなければ一番の寛ぎどころの家で無駄な衝突を繰り返す可能性も否定できない。

あくまでそれは可能性の域を越えないが、確実に言えることは雰囲気と生活リズムの変化。不平のない日常を破壊するということ。

なら、父の再婚は是が非でも反対したいところだが……

(でも、母親との関係があれだったからな)

父親と母親。二人の間に愛があったとは思えなかった。

仲が悪いわけじゃない。むしろ関係は良好だったと時哉は幼い頃の記憶から感じ取った。

だが、そこに愛はなかった。

良好な関係　それはフレンドリーな意味であった。

「おかえり」「ただいま」なんて言葉のキャッチボールだって、果たしてあったかどうか……

つまり時哉の父親は二児の親ながら妻を持ったことがない。時哉と優姫を産んだ女は和哉にとって妻ではなく、時哉にとって母親ではなかった。

産んだ。ただ、それだけ。

原因は和哉にもあるのだが、彼はきちんと二人の父親になれていた。だから良い、という話でもないが。

和哉が馬鹿ながらに四苦八苦しつつ二人を養っていたのは時哉は理解している。

だから、

(反対し辛いんだよな)

時哉たちを産んだ女との時とは違うし、同じ轍を踏んだとも思えない。

お互い愛を育んでいたのなら……いい加減あの馬鹿も父親としての幸せを掴んでもいいのではないか？

極度の面倒臭がりの気力欠乏症の寝ぼすけだが、愛情がないわけではない。もしかしたら、と再婚の可能性を考えなかったわけでもない。

しかし、結論を出すにはどうしても躊躇してしまう。

「あゝ……面倒臭え」

うんざりと頭を掻いて唸った。

「優姫が怒るのも当然よね。『死んだお母さんのこと忘れちゃったの!?!』って」

「ん?」

時哉は理解不能な発言に首を傾げる。

「死んだ……母さん?」

「だからアンタんとお母さん、事故で死んじゃったんでしょ?」

「いや、普通に離婚だが……」

「……ん?」

と、首を傾げる優子。

「……んん?」

と、同じく時哉。

『んんん?』

噛み合わない情報に、今度は二人揃って首を傾げた。

第一話 ?

「……どういふこと？」

そう問う優子だが、それは時哉も同じだった。

時哉は父の和哉本人から離婚と告げられ、その過程も一緒に聞いた。

なんとも情けない出生秘話に、時哉はたっぷり軽蔑の視線をくれてやった。

嫌悪されるかもしれない話。嘘のレベルを越えているし、嘘つく必要もない。間違いなく二人は離婚したのだ。

死んだ　　なんて情報は何処から齎された？

そう推理すると、

(ああ、なるほど)

答えはすんなりと出た。

優子の情報源は優姫以外にありえない。

そして和哉が、溺愛する優姫に真実を伝えるなんてありえない。

今も尚、優姫のお怒りを買っているなら電話越しでも「アバアアアア……！」と内心奇声を上げているだろう。

下手すればショック死だって視野に入れなければならぬ。それくらいの溺愛っぷりだった。

そんな優姫に自身が嫌われそうな情報をありのまま話すわけがない。きっと情報操作（CGを駆使して仲睦まじさを演出）に隠蔽（不用な思い出たちの処分）を巧みに利用して、母親の存在と生き方を絢爛とさせたのだ。

まあ、だから優姫は再婚しようとする和哉に怒鳴っているのだが、自業自得である。

「元々、馬鹿親父と俺らを産んだ女はただのセックスフレンドだったんだよ」

「セツ……！？」

優子は顔を真っ赤にさせて言葉を失う。

そこに時哉が冷たく、

「貴様の持つてる本にたくさん載ってそんな単語だろうが」

「う」

凶星。痛いところを突かれたとばかりに顔を背ける。時哉の半眼が右手に収まる本に突き刺さると、優子は本をサツと後ろに隠した。

「まったく、なに免疫の無い婦女子を装ってやがる。お前の”ふ”は”婦”じゃなくて”腐”だろうが、この腐女子」

「装ってないわよ！ アンタがいきなり変なことを言うから」

「はいはい、ワロスワロス」

「適当に流すな！」

「うるせーな。今時の高校生にそんな珍しい単語でもないだろ。放課後に校舎裏やら屋上やらにいけばそれなりの確率で見えるぞ」

時哉は毎日二時間は授業をサボり、例に挙げたの二つの視界に入らない隅で居眠りをしており、午後の授業を抜けると放課後まで寝過ごすパターンも少なくはない。

「男女の粘着質でくぐもった吐息や波打つ水音で目を覚ますんだ」

「そ、そんななまめかしい話なんて聞きたくないわ！」

優子は顔を赤くしたまま、いやいやと全力で顔を左右に振った。

「なら耳を塞げよ。興味津々じゃねーか」

否定しつつも、耳はでっかくなっちゃった！ 状態。密かに聞き耳を立てていた優子に半眼を向ける。

「ここまで堕ちてれば、いつそ清々しいな。背景色と心の色は黒と赤と紫が入り混じった暗黒で決まりだ」

「アンタにだけは言われたくないわ！ 腹の中が真っ黒な分際で」
「変な誤解はやめろ。俺はただ人を陥れたりするのが居眠りと怠惰の次に好きなだけだ」

「私は何の誤解もしてないって断言できるわ！ アンタには『拳で語る』なんて男らしい根性はないわけ！？」

「……………」

如何にもアレな台詞の登場に、改めて堕ちレベルがカスタムしていることを理解した。

「だが、まあ 分からんでもないが」

「…………嘘」

「嘘じゃねーよ。万の言葉を尽くすよりも、想いの乗った拳の方が真摯に伝えてくれることはある」

愛用の本（BL）に登場するメインヒーローが語るような熱い台詞を、あの時哉が吐いた。

あの時哉が！？

あの前世がなまけもののような、その習性を来世でも立派に受け継いだような、あの時哉が！？

「……………夢じゃないわよね」

うつろんそつに呟いて自分の頬を抓る優子に、時哉は大真面目に言い放つ。

「『拳で騙る』ってやつだろ？ 俺の得意分野、兼、趣味の一つじやねーか」

「字が違あう！」

優子は全力で突っ込みを入れた。

やはり青春なんて爽やかなイメージから何処までも掛け離れた残念男。キラツと白い歯を見せて爽やかに微笑めば大抵の女子は落とせる素材だというのに、口を開けば「怠い、眠い」「うるせえ、黙れ、死ね」だの、もう本当に素材効果を打ち消すことが得意な男である。

「アンタは、一体何処まで人間として終わってんのよ。絶対、私にどうこう言える立場なんかじゃないわ。いい加減更正しないと、もう死ぬまでクズ人間一直線よ」

「そんな説教垂れる優子に一言 五十歩百歩」

「なんですって!？」

同族嫌悪。まさに水と油のような、同じ液体でありながら混じり合うことのできない二人。

幼い頃から男女の交流が続くなんて漫画やアニメではよくあるケースだが、現実にそんなケースはほんの一握り程度しかない。大抵は成長と共に性別の壁に阻まれて親交は薄く いつかは途絶える

ものだ。

それでも、そんな一般のケースに入らなかった織部兄妹と木下姉弟は反発することはあっても（といっても反発するのは時哉と優子だけ）仲が悪いわけじゃないのだ。むしろ同じ空間を共有すると心地好いくらい。

いつもは優姫や秀吉が宥めて事なきを得るのだが、今回そのストッパーは惜しくも不在中。

喧嘩するほど仲が良い、とは時哉と優子のことを指しているようなものなのだが、混ぜるな危険、という現れでもあった。

もはや二人は肝心なメインストーリーをほっぴり出して、

「潰す！」

「やってみな、えせ優等生」

何故か戦いの火蓋が切って落とされたのだった。

第二話？（前書き）

バカテスト

『我輩は猫である。』（ない）の（）に当て嵌まる言葉を書きなさい。

姫路瑞希の答え

『我輩は猫である。』（名前はまだ）ない』

教師のコメント

正解です。一般正解率80%を超える問題は姫路さんには簡単でしたね。

72

織部時哉の答え

『我輩は猫である。』（生きる価値は）ない』

教師のコメント

血も涙もありませんね。

吉井明久の答え

『我輩は猫である。』（原形はまだ）ない』

教師のコメント

原形がないのに、どうして語り部は自分が猫だと思ったのでしょうか。

土屋康太の答え

『我輩は猫である。(ね、猫!? ……なら女子のスカートを堂々と下から覗くことが……! ……なんてことは)ない』

教師のコメント

テスト用紙に赤く染まっていたのは、こういうワケですか。

椎名深夏の答え

『我輩は猫である。(名前はまだ)ない』
『我輩は猫である。だが、ただの猫ではない。我輩、名前は確かにまだ無いのだが、この世の悪の全てが集結する裏武道殺人大会において覇者となって以降、残響死滅という称号を獲得していた。』

そんな我輩は今、その称号を狙って襲い来る猛者たちとの激闘に疲れ果ててとある田舎町に身を寄せていた。

他猫の血で汚れた我輩を、村猫たちは心良く迎え入れてくれた。都会の凍てついた戦いの鎖で繋がれた我輩は、当初、それを畏ではないかと勘繰ってしまった。今思い返せばとんだマヌケ話だ。

心休まる日々が続いた。ここなら我輩も一介の猫になると、そう信じていた。

だが 現実はそう甘くなかった。

くブラッディキャットく

プロローグ、終わり

教師のコメント

正解をきちんと書いているところがいいです。

第二話 ？

木下秀吉は我が目を疑った。

春休みでも部活動は活発に行われている。彼（彼女？）が所属する演劇部も例に漏れず活動中だった。

彼の演技力には定評がある。

均整の取れた中性的（よりちよつと少女気味な）顔立ちと無駄な脂肪の無いしなやかな肢体から繰り出される演技は誰をも惹き付け、その目にしかと焼き付かせる。

身体だけではない。彼は『心で演じる』という箴言を一高校生の身でありながら体言する名役者なのだ。

あまりに演劇の道へのめり込み過ぎて成績の方は、姉とは比べるまでもなく残念さんなのだが、引き換えに男性を虜にする魅力値は秀吉に（遥かに）部があつた。

そんな彼は部活動を終え、帰宅すると身体をゆっくり休めるつもりだった。夕食まで数時間ある。仮眠くらいは取れるだろうと自室の扉を開いた。

昨日干したばかりの布団はさぞ柔らかく、窓から差し込む陽光の恩恵を受けて仄かな温もりを宿して心地好いに違いない。

たまにはダイブするのもいい。きつと優しく包み込んでくれる。

そんなことを思い、頬を緩ませる。

(時哉の気持ちも分からんでもないのう)

自分の姿から同性の幼なじみを投影した。

絶世の美貌を持ちながら性格が反比例してしまい全てを台なしにする気力欠乏症の幼なじみ。なお、それを受け入れて現在進行形で墮ちていく怠け者。前世は間違いなくなまけものだ。

小、中、高、と学園に入学する度に、一学期の間で告白された回数には十は、くだらない。むしろ一日で十人に告白されたこともある。

外面オンリーなら超優良物件なのだ。

女子にとってこれほど自慢できる(やはり外面オンリーで)彼は他にいない。様々な意味で手に入れた存在だった。

が、彼は一度も首を縦に振らない。

他に好きな子がいるわけでもなく、ただ面倒臭いから。

彼女なんて存在、時哉にとって蛇足以外の何でもないのだ。

「そんなと一緒にいる時間があるなら、俺は寝る」

時哉はそう語る。

そんな時哉が今の自室にある布団の状態を聞けば、飛んで来る可能性は高かったりする。そしてダイブしてお得意の「ZZZ……」。

もちろんそんなこと教えたりはしないが。

(この話をすれば時哉のやつ、全力で羨ましがりそうじゃのう)

クスツと笑い、部屋に足を踏み入れて、

そして彼は我が目を疑い、言葉を失った。

「いい加減、死ね！ この暴力女！」

「死ぬのはアンタよ、ヒモ男ッ！」

「はあ！？ 頭大丈夫か？ 言葉の意味履き違えてんぞ」

「将来性を意味して、よ！」

「残念、バイトできる人間でした！」

「封筒貼りの分際で何、自慢してんのよ！」

「やってる事実には変わりねーんだよ、現在進行形で親のすねかじりが！」

「私だつてやろうと思えばバイトくらいできるに決まってるでしょ！」

「誰だつて言える月並みな台詞　これはもう、果てしなくあれだな。死ねッ！！」

「だからアンタが死になさいよ！　この腐れ堕ち人間！」

「腐ってるのはどう考えてもテメエだろ！　十二歳以下の男にしか興味ないシヨタコンが！　帰り道で小学生見ながらハアハアしてる様が容易に浮かぶんだよ！」

「んなことするワケないでしょうが！　あくまでフィクションの中の話よ！」

「それだけで果てしなくイタいんだよ！」

「死んだ魚みたいに濁った目をしたアンタも充分イタいから安心なさい　そして死ね！」

「死んだ魚だつて刺身やらなんやら使い道は多々あるだよ、腐敗したお前と違ってな！　あと死ね！」

「あらそう、でも菌まみれのアンタを使ってくれるとこなんて何処にもないわよ！　ていうか魚に謝らないとね、こんなヤツと比較対象に使っちゃって！　ついでに死ね！」

「濁りキャラに、んなこと言われる筋合いねーんだよ！　おまけに死ね！」

「ていうか気力欠乏症って何？ ワケ分かんない病名勝手に作ってキモいんだけど！ 追加で死ね！」

「あ、外にBL界の巨匠」

「えっ」

「馬鹿は見るー！」

「あ、空に羽毛枕」

「えっ」

「アホは見るー！」

「「謀ったな（わね）！」」

「都合よく、そんなんがホイホイ歩くか！ つーか、俺が知ってるワケないだろボケ！」

「空に枕があるなんて嘘に騙されるなんて夢の見すぎよ。頭おかしいんじゃない、病院行けば！？」

「病院行くのは腐敗した心のテメエだろ。精神科にサッサと行け！」

なんて罵り合いながら部屋にある物品を何だろつが構わず投げまくる。

枕はもちろん、目覚まし時計に本棚に収まる書籍の数々、リモコン、CDケース、ペンケース、演劇の小物、文房具、e t c ……

もはや足場一つ存在しないゴミ屋敷と化したその部屋で、尚も乱闘を続ける姉と幼なじみ。

「……………」

なぜ、いる？

なぜ、乱闘している？

なぜ、戦いの火種が加速している？

なぜ、なぜ、なぜ？ 脳内にひたすら反響する疑問の処理に秀吉は対処を追われていた。

その間にも、争いは続く。

どれだけ罵声を浴びせようと二人は強欲に相手を罵る言葉を求めていた。

この状況を一言で表すなら、

「カオスなのじゃ！」

秀吉は蒼白な顔で悲鳴を上げた。

完全な被害者でしかない彼の悲劇はあまりにも無情で悲惨だ。

自分が、朝に認めた部屋は整理整頓はきちんとされて清潔感が保たれていたはずなのに、今に認めた部屋は、まるで空き巣が入ったかのように荒らされている、荒らされ続ける。

（一体ワシが何をしたというのじゃ！？）

と、思いながらも頭では大体の予想はついていた。

時哉と優子は昔からそうだった。

似た者同士というべきか、お互いがお互いの性質を理解し、自分のプラス方向に利用する妙に理知的な間柄にあるから、お互いに対する沸点は大分低いのだ。静かに 空間を共有する。

が、その分、一度火が着くとひたすら油が注ぎ込まれるように燃え上がる炎は拡大していく。それはもう、自分たちでは歯止めが利かない勢いで。

似た者同士 しかし、それは稀に同族嫌悪を引き起こす。二人が喧嘩する理由はほぼそれ一つ。

なんて遠い言い回しをやめると、結局は子供の喧嘩。底が知れる浅く幼稚な争い。

心の成長率があまりにも低すぎた。

そして、この荒れた部屋を二人が片付けるだろうか 否。

間違いなく「乙」「」なんて言って、放置してさようならルート

に突入。

「なぜこんなことに」

秀吉は深い溜め息を着いて仲裁に入った。

第二話 ？

秀吉の奮闘が功を奏して、二人の乱闘は一先ず停戦状態を迎えた。

しかし、所詮は一時的な停戦。偽りの鞘に納めた刃は刹那の隙があれば即座に抜き放たれそうだ。

その証拠に、

「あゝ、もう最悪。どっかの馬鹿のせいで汗だくよ」

「（プツ）お前の場合、汗っていうより汁だな。汁だく」

「なんですって!?!」

「二人とも、やめるのじゃ!」

お互いの刃は敵を斬り裂きたいと妖刀のように震えていた。吊り目気味の眼差しを更に鋭くして睨み合う。

秀吉の制止がなければまたも血戦は始まりのゴングを鳴らしそう
だ。

「で？ 今回は何が原因だったのじゃ」

「理由なんてとうに忘れた!」

「宿命のライバルではないのじゃから……」

秀吉はガツクリと肩を落とした。しかしここでくじけるわけにはいかない。ほんの少し、ほんの少しでも二人の敵愾心を解く話題性があれば……

「喧嘩になるまでは一体何を話していたのじゃ？」

「……………」

そう言われて二人は思案顔をする。なれば正解を手繰り寄せたために自然と冷静になるもので、熱していた頭は徐々に冷めていった。

確か……と考え込んで数秒後、

「なんだっけ？」

と、時哉。

「ジャージの側面にあるヒモは入るか入らないか？」

と、優子。

「いらんな。無駄な装飾はただ重いだだけだ」

「いるわ。あれがあるから外出だって出来るのよ」

更に、

「ポカリ派？ アクエリアス派？」

「アクエリアス派ね。ポカリはスポーツドリンクにはちょっと甘すぎるわ」

「ポカリ派です。その甘さが生きた心地を実感させるんです」

更に更に、

「ブルーレイは必要？ 不要？」

「不要です。ビデオで生きてきた俺にはDVD とういか見れば問題ありません」

「いいえ必要よ。高画質にこそ夢は詰め込めるのだから」

まだ飽きたらず、

「ソー派？ 任天 派？」

「ニーね。ブルーレイ同様、機能性こそが重視よ」

「任天堂です。スマブラやマリカーの中古価格が如何に人気かを物語っています」

最後に、

「サンタクロースはいるか？ いないか？」

「いません。夢と現実の混合が許されるのは中二までです」

「そうね。低学年の頃、洗面所でお父さんが赤い服と白い髭をセツトしているのを見た瞬間、私の夢は崩れたわ」

「そこだけは同調した!？」

秀吉の叫びは無視して、二人は顔を見合わせ「んんん?」首を捻る。

「「なんか違うなあ」「」

「それはそうじゃろつて!」

というかすっかり仲直りと呼べる間柄まで修復されている。揃って首を捻る、なんて良好な関係じゃなければできる芸当ではない。

この気持ちの切り替えの速さは昔からなので特に驚きはしないが、いまいち釈然としない表情で秀吉は、二人を見送ることにした。

「何の話だったっけ」

「昨今の離婚率の高さ?」

「ボケはもういいわよ。いい加減話進めてこのグダグダ感を拭わないうと」

「馬鹿親父が結婚するって話だったな」

「そうだったわ。ようやく整理がついてきた」

「　　つて、二人とも、もしや初めから気付いておったのか！？
いや、それより結婚！？　そんな重要な話ほっぽりだして喧嘩おっ
たのか！？」

「　「だつてこいつが」」

「とりあえず、お互いの罪をなすりつけなくてワシの問い掛けに答
えてほしいのじゃが」

二人も話を進めることは同意だったので、優子は口を閉ざし、問
題を持ち込んだ時哉が応じることにした。「面倒臭い」と呟いて。

時哉自身、優姫から簡潔に説明されたていどなので摘むくらいし
か状況は理解してなかったが、とりあえずその摘んだ部分を口にし
た。

「父から電話。優姫、出る。優姫、驚愕。俺、理由聞く。内容、再
婚　以上なり」

優姫から伝えられたであろう簡素な説明を、更に略して時哉は言
った。

秀吉は耳に入つて来る情報を、腕を組んで、ふむふむと咀嚼する。

……なぜに片言なのかという疑問は置いといて。

チラツと時哉の顔を伺う。

秀吉は絢爛たる逢瀬を投げ出してまでその瞬間を演劇に注ぎ込む
ほど、重度な演劇依存症である。俳優女優顔負けの演技力は同時に
洞察力も卓越することを意味する。

そんな彼は時哉の眠そうな表情の中にある僅かな動揺を見抜いていた。

それはそうだ。時哉は基本やる気なしの事勿れ主義だが、一応（ここ重要）良心というものが恐らく（ここも重要）存在している。

至福（怠惰）の時間の危機にあるのも事実だが、新しい家族ができることにだって不安はある。

頼る というほどではないが、とりあえず「どーしたもんかなあ」ていどの心持ちで木下家まで足を運んだのだろう。

滅多にない幼なじみの動揺は見ていて面白いが、また乱闘を勃発されたら堪らない。後でこの戦場跡地を元通りにする必要があるのだ。

何か良いアドバイスを授ければ良いのだが……

先にこの事実を知った秀才な姉に視線を送る。

（姉上）

（無理）

（速ッ。断念するの速過ぎではないか？）

（私になにかできるとでも？）

秀吉は唸った。

優子の場合、まずは新しい家族への対応の仕方を考慮する。学園の時のようにキツチリとした生活を送るか、それとも最初から本性をさらけ出すか。選択するのは間違いないが、前者になるのが、いつまでもそんな生活を続けるわけにはいかない。頃合いを見て、徐々に紐を解いていくだろう。

だが、そんな高等技術をこの怠惰男にできるわけがない。

「ちなみに時哉よ。その新しい家族とはいつ会つのじゃ？」

時哉は平然と、

「ん。今日の六時」

「……………」

秀吉は時計を見る。

五時十五分。

どつやら時間はあまり残されていないようだ。

第二話 ？

十

「優姫。何をそんなに怒っているんだ？ カルシウム不足か？」

「どうしてそうなるのかなあ！？ 普通に考えたら分かるよね！」

「いやあ、時哉は普通とはちょっとばかり掛け離れているからな」

「その原因であるお父さんは黙ってて！」

「はい！」

二人の父、和也はビシツと姿勢を正した。

ここはファミレス。徒歩十分の距離にある繁華街の一角。その一つの席に三人は腰を降ろしていた。

テーブルを挟んでソファが二つ設けられているが、三人は並んで座り、片面のみを使用していた。いつもなら時哉は一人向かい席に座るが、今回にその、いつも、は適用されない。

「まだ来ないのか？」

「約束の時間まで十分はあるから、もう少し待ちなさいな」

まあ別にいいが、と時哉はテーブルに突っ伏す。

今回はなぜ、いつもの、が適応されないのか？ その理由はあと数分後に、再婚相手と夕食を取るようになっていいるからだ。

父がはしゃぎすぎて約束の時間の二十分も前に連れて来たものだからろくに考えも纏まらない。

結局秀吉から出された案は「初日くらいはきちんと」と模範的な内容だった。しかし、その初日くらい、すらも面倒臭がる時哉は和也にイチゴパフェ三つを確約させて実行することにした。

(あー、そうだった。しつかりと見せ掛けないと)

心底面倒臭そうな顔で起き上がり、チラッと二人を見る。

「……………」

沈黙。二人とも膝に置いた拳をプルプルと握りしめていた。まるで処罰を受ける子供のように。あるいは何かを我慢しているように。

他者の感情に疎く、また考慮もしない時哉は欠伸をかきながら平然と言う。

「トイレか？」

「緊張しているんだよ！！」

あまりにもマヌケで鈍感すぎる発言に、思わず声を荒げてしまっ

た二人は集中する視線に気付き、縮こまる。

再婚相手との邂逅なんて一大イベント。優姫と和也の反応こそが正しく、時哉はもう、頭がイカれているとしか思えない。喫茶店に着く以前からガチガチに緊張して一挙手一投足にすら震えているというのに、なぜこの男はいつも通りゴーイング マイ ウエイなのだ？ 絶対に心臓に毛が生えているなんてレベルではない。

不安が決してないわけではないのだが、彼は感情の取捨選択ができるタイプ。秀吉や優子が演じる力に秀でてるように、時哉も幼い頃から共にいたせいかな。その能力が自然と備わった。もしかするとそれが今の時哉を形成したのかもしれない。それを行使して見事に緊張感を切り捨てて怠けていたのだ。

優姫も同年代の同性からよく相談を持ち掛けられていることから、演技に関してはそれなりではあるのだが、自身が一大事の輪に入ってしまうと戸惑いが隠せないようだ。

緊迫の粒子に苛まれる二人の心情を察することなく、時哉はコースターに置かれた甘さたっぷりなコーヒーを口に流し込む。

甘いもの好きな彼は口一杯に広がる糖分に満足げに頷く。

同時に真ん中に座る和也は「ああー、緊張する」と重い口調で心労を吐いた。

……？

それはおかしくないか？

「アンタ、その再婚相手とはもう何度も交流してんだろ。別に緊張する必要はないか？」

「あ……それは私も思ってたかも」

弱々しい声で優姫が同意した。

「思ってたって……気付いてたのかよ」

時哉、驚愕。

「今更気付くお兄ちゃんの鈍感さに私も驚愕だよ。で、どうして？」

息子、娘を紹介するだけでこの奇人が緊張なんてするわけがない。時哉と優姫は確信していた。

なぜなら、

（俺（お兄ちゃん）の父親なんだから）

……非常に頷けた。

左右から刺してくる視線に和也はうつろたえ、言葉を濁そうと目を泳がす。その情けない姿はまだ隠していることがある決定的な証拠だった。

そうやって時間稼ぎをして免れるつもりでいるのか？

甘い。それを理解して見逃すなんて寛大な心、時哉と優姫は和也限定ながら 持ち合わせていない。

この単細胞生物の砂城よりも儂い牙城を崩すのは簡単だ。たった一突きで終わる。時哉と優姫は目を合わせると、何か伝わったのか同時に頷いた。

「言ってくれなきゃ、お父さんって呼ばないよ」

「言ってくれないと、パパ　って呼ぶぞ」

「言います！　言いますからやめてください、どっちも死刑宣告だから！！」

姿勢をビシッと正し、泣きそうな顔で和也は命乞いをした。

溺愛する優姫から「お父さん」と呼ばれなくなるのは会心の一撃だが、生意気に「馬鹿親父」と呼んでくる時哉に「パパ」なんて呼ばれた日には……

蒼白な顔。込み上げる恐怖を削がれつつある気力で辛うじてながらに堪え、和也は渋々と口を開いた。

「実は再婚相手の人も子持ちでな」

「こいつが義父か……可哀相に。終わったな」

「黙らっしやいー」

率直な感想をサラッと述べる時哉を一喝し、続きを語る。

「その子たちはお前たちと同年齢なんだ」

「間違っても手を出すなよ」

「それはこっちの台詞だよ馬鹿時哉！ しかもどうして女の子だつて決め付けるんだよ」

「違うのか？」

「いや、違わないけど」

「あゝあ。新学期始まって早々『お前の父親、義娘に手エ出したんだって！？ マジウケる、マジパネェンスけど！？』なんて言われる羽目になるのか……」

「出さないから！ 娘になる子に手を出すなんて、俺そんな無節操で最低なクズなんかじゃないし！」

「粗大ゴミだもんな」

「ゴミでもない！ 同じ人間！」

「ざけんな、殺すぞ」

「理不尽にキレられた！？」

「お前に人権なんて存在しないから安心しろ」

「とりあえず罵声から離れる！」

「馬糞？ そりゃお前だ」

「ば・せ・いッ!」

「パセリ? リンゴ」

「え? ゴ、ゴリラ」

「ラッパ」

「パンツ」

「ツナ」

「ナ　　って、なんでやねん!!　何でしりとりなんてやってんねん!」

「何で関西弁」

「お願いだから少し黙っててくれよ!」

「そっぴや優姫が止めにこないな」

「ねえ、聞いてよ!」

和也は涙声ながらも必死に叫んだが、その思い虚しく時哉は既に和也を視界から追い出してた。実に仲睦まじい親子である。

こういつ遊びをしている場合、和也の精神を危惧した優姫が苦笑混じりに止めに入るのがお決まりのパターンのはず。

だが、そのパターンは破られた。今日という日が特別でかなり緊張しているのは理解しているが、和也に共にけしかけた時はいつも通りだった。いきなり調子が崩れることもなかるう。

疑惑の目を向けると、優姫は別の場所を眺めていた。

知らん顔をしているのではなく、何かに引き込まれるように、ただ一点、喫茶店の入口に釘付けられていた。

時哉もその視線を辿る。

そこには三人の女性が立っていた。三人とも、優姫と同じく視線を向けていた。

再婚相手、子持ち、同年齢。

三つのキーワードが頭に浮かび上がり時哉は即座に理解した。

「馬鹿親父、あれが再婚相手の人か？」

第二話 ？（前書き）

更新遅れました。申し訳ございません。

第二話 ？

少し戸惑いを隠せない様子の三人を見据え、時哉はもしや、と、

「さっきのやりとり見られていた？ あーあ、色んな意味でやつちまっとな」

「誰のせいだと思っているのさ!？」

和也は小声で叱り、慌てて席を立つと三人の出迎えに行った。

視線を向けつつも別のことを考えて時哉は彼女たちを見てはいない。それより先に思案する必要があった。

(あのやりとりからいい人って思えるやつなんていないだろーな。
秀吉の案は滅、と)

そもそも彼の性分から善人呼ばわりは気持ち悪くて仕方ないのだ。悪魔や鬼と言われる方がよほどマシだった。そこから狡猾な人間遊びに派生できるから。

いい人ぶる必要なんてカケラもない。とりあえずお怠惰さんだけを隠しておこう、と溜め息一つ着いて時哉は立ち上がった。

「どーも」

小さく一礼すると、優姫も遅れて頭を深々と下げた。

「は、はじめまして！」

囁んだ。

(まー、なんとありがちな)

顔を真っ赤にさせて「はわぁ!？」と後退る優姫に同情的な眼差しを向ける。相手側は、そんなマヌケな行動が巧を奏してか緊張感は多少なりとも解れた模様。軽くお辞儀を返して一同は向き合って同じ席に着いた。

「……………」

暫しの沈黙が訪れる。

就職を賭けた面接というのはこういう心情なのかねー、と時哉は、落ち着きのない家族と家族になる手前にある彼女達を俯瞰してみる。

こういった性分を持つ者は珍しいだろうか？

会う手前は緊張していても、実際対面してみると落ち着いていた対処ができる、冷静な回転ができたりする。彼はそのタイプに属していた。

だから心情的に余裕ができて一人、周囲の観察を平静としていた。

皆の気持ちも分からはない。

合コンのように軽いノリで切り出せるわけもない。この瞬間の、

生涯における重要性はあまりにも高い。不用意な行動を慎み、正しいと思える選択を模索するのに頑張っているのが手に取るように分かった。

それにはきつかけが必要だ。

波に乗る準備は着々と築き上げている、あるいは既に築き上げているが、肝心の波が来ないのだ。

心持ち、誰でもいいから波を作ってほしい。そうすれば乗っかるから、と雰囲気伝えていた。

(やれやれ、仕方ないな)

時哉は小さく笑う。

その役目を負う人物は決まっていた。

それは他の誰でもない。当然とも言えること。

(おい。行け馬鹿)

ガチガチに緊張する和也のスネを蹴って、その意を込めた視線を送った。

すると和也はドツと冷や汗を流し出して視線を送り返してくる。泣きそうな顔で。

(この雰囲気で切り出せるほど頑丈な心を、おじさんは持ち合わせていないですぞすわよ!?)

(アンタの心がポツキー以下であることは百も承知だったの)

(なら、キミが言ってやってよ、トツキー!)

(誰がトツキーか)

不愉快なあだ名に本気の殺意を抱いた。

(そもそも、この俺がアンタの心の心配なんてすると思ってるのか?)

(ああ、そうでしたね! 貴方はそういう冷たい人間でしたね! この悪魔!)

(ほう、悪魔)

時哉の目がスウツと細くなり、薄い唇が吊り上がる。

あつさりと罵声を受け入れ、ならばそれを演じてやろう、くつくつく と、瞬時に、この男を悪夢へとたたき落とす闇の指す道が紡がれた。

ちよろいもんよ しかし、馬鹿と言えどさすが悪魔の父親といふべきか、和也は息子のあくどい策略を看破した。

(余計なことはしないほしい!)

(チツ)

(舌打ち！？ 人の幸せを壊すの、そんなに楽しいのデイスか！？)

木下家では幸せになってもいいんじゃないか、と(奇跡的にも)善良な心が働いていたが、いざ迎えてみると、

(それはもう)

満足げな表情を見せ、和也の顔を恐怖に凍り付かせた。

彼の気まぐれは常にマイナス方面にしか発動しない。周囲の人間は振り回されてばかりだ。

(っーか、いいのか?)

すっかり人を弄んだ時哉は当然の疑問を口にするが、

(何が?)

(ん)

顎で向かいの席を指す。

暫しの間、アイコンタクトに没頭したものだから、続く沈黙に相手側は対応に困っていた。

「あ、す、すみません時哉の奴が緊張してるみたいで！」

和也は慌てて言葉を紡ぎ出す。それは結果として時哉の望むものだった。

出された言葉は不快そのものでしかないのだが。

すると向かいに座る一番年上(二十代後半くらい)の女性は「まあ、そうなんですか」と親しみやすい笑みを見せた。

向けられた視線に時哉は曖昧な返事をして和也を睨みつける。それはもう溢れんばかりの殺意を込めて。

(殺す)

話の流れが始まったなら、いち早く帰宅してベッドに飛び付いた時哉が邪魔をする理由はない。それだけを誓って沈黙を決め込んだ。

第二話 ？

「では、当然ですが って、敬語はよそよそしいかな」

これから家族になる間柄なのだ。敬語から入れば微妙な関係を築くことになるかも、と危惧した和也はできるだけ柔和な笑みを作つて続ける。

「自己紹介をしようか。僕は織部和也。歳は今年で三十八になるよ。仕事はごく普通のサラリーマンかな」

戸惑いながらも少女二人に目を向けて、

「キミたちの義父になるのかな」

「あ、はい……」

「……（コクコク）」

返答に迷つてか、こちらも戸惑いは隠せていない。特に髪を二つに縛っているスタイルの良い少女は鱗片に複雑なものを抱えているように見えた。

「すぐに父つて呼ばなくてもいいから、できれば少しずつ歩み寄つていければ嬉しいな」

やんわりと微笑む。

すると少女たちは少し緊張を解いて弱々とだが、頷いてくれた。和也はそれだけで満足だった。

「じゃあ次は」

笑みを燈したまま、その視線は時哉に向いた。

「……俺？」

まあ、指揮を和也が執っているから当然なのだが。

やや崩れた姿勢を正しつつ内心で大きな溜め息を着いた。

突飛な自己紹介はいらない。誰もそんなもの求めていない。荒波を立てないため、発言すべき言葉は平々凡々かつ素っ気ないものでいいはずだ。

「織部時哉、十六歳。趣味は睡眠、特技は二日連睡眠、好きなものは睡眠と布団と枕。三度の飯より睡眠が好きだと自負している。以上」

「……」

空気が淀んだ。時哉は「ん？ これは、やっちゃった の世界か？」と、しかし「まあ、いいか。過ぎたことだし。あー怠、眠っ」と淀んだ空気を作り出した本人でありながら我関せずな表情に変えて視線を逸らした。

他所へ向いている時哉は気付かない。隣で和也が「きゃああああ

！この子つたらなんて突飛な自己紹介をーん！！」とヒステリックな叫びを上げたそんな表情をしていることを。

和也は全力でぶん殴って差し上げたい衝動を堪えてこの空気を打開すべく、話の進行を決めた。

「じゃ、じゃあ次は優姫。 ” お願い ” 」

「ふえ！？」

異様に強調されたお願い。それは時哉と同じ徹は踏まないでくれ、という意味を含んでいた。

唐突に話を振られた優姫はビクツと小さな身体を跳ねされて目を見開いた。パニック状態に突入する優姫に、和也のお願いが受理されたのか、それは優姫本人も理解できていないだろう。

面白い発言来るかねー、と時哉は優姫を見た。

「え、えーと、あと、んと、ゆ、優姫です！好きなものは、年に一回だけ優しくなるまさにその瞬間のお兄ちゃんです！でもでもその優しいVersionお兄ちゃんは今日の朝に発動したのでこれから一年はいつもの冷酷お兄ちゃんなのがちよつと残念です！」

「おい、貴様」

なんてこと口走るのだこの小娘は。

否定はしないが、パニックに陥っているのも分かるが、言動には気を付けてもらいたい。時哉は後で憂さ晴らしに優姫を弄ることに

した。

それはともかく、優姫の言葉を真に受けて「え？」と訝しむ彼女達をまずはなんとかしなければ。

生贄は、まあ 元凶でいいだろう。

「優姫。緊張してんのは分かるが、だからといって話を捏造して逃げるのは感心できんぞ」

「ね、捏造なんて」

「っーか自己紹介のくせに自分の紹介文が少なすぎる」

「そんな」

「それでいいのか？ いけないな。じゃあ始めからやり直してみよう っー いっそ人生も（ボソ）」

「今不吉な言葉が聞こえたよ！ ぎりぎり聞き取れるか取れないかの音量で人生的なりセットを奨めたよね！」

「はっはー。なんのことやら。いいから自分の年齢を口に出してみな」

「十五だよ！ 今年から高校生だよ！」

「ええええ！？」

それに驚いたのは、向かいに座る残りの女性陣。

目を見開き、ありえないと空いた口が塞がらなかった。

「ま、真冬と同学年でしたか……。それにしても」

優姫と対面する金髪の儂げな雰囲気が印象的な少女が言う。

小さいです。

囁いたような呟き。だが、「小さい」や「ミニ」という”小”を示す言葉に過剰反応を示す優姫にはしっかりと聞こえていた。

顔を真っ赤にして肩を震わせて、

「どーせ私は幼児体型だよおおおー!!」

堰を切ったように大声で泣き出した。

ファミレスお構いなしに泣きはじめた。

気持ちは分からないでもないが、この場に居座る一同の心情は同情よりも動揺である。公共施設で泣き出されれば、当然とも言えるが。

優姫がそれに気付かないわけもないが、如何せん彼女のタブーに触れてしまった。触れるどころか驚掴まれてしまった。我慢の限界を超えてしまったのだ。

「時哉！」

和也が怒鳴る。

「俺？ クルティカルヒットをさせたのは いや、まあ……うん。
反省しようと思っている」

早くも家庭に荒波を立てたくない和也の必死な形相（血涙）に押され、時哉は珍しく折れることにした。

あくまで、反省しよう” ”思っている” ”の範囲は超えないが。

第二話 ？（前書き）

こちらの作品は外伝として、ゆっくり連載することになりました。学校風景が書きたくてしょうがなかったです。

本編は”銀”という名前のリンクをクリックしてくだされば閲覧できると思います。

第二話 ？

優姫が泣き止んで一区切り。

皆で仲良く協力プレイ。その結果、疲労を分かち合った一同は和也がコホンと咳をして軌道修正。

「では次は香澄さん、お願いします」

頷いたのは真ん中に座る二十代後半に見える女性。おっとりとしてどこか抜けているような、ホワホワな雰囲気だ。

「香澄と申します。この度は和也さんの熱心なプロポーズを受けて夫婦となりました。時哉さん、優姫さん、よろしく申し上げますね」

穏やかな表情で微笑む。理想的な母親を体現したような姿に、時哉たちは虚を突かれ、少し送れて頭を下げた。

顔を上げると和也が「ん？」と語弊が生じているような表情をしていた。

時哉は一瞬疑問に思うものの、とりあえずは後に取っておくことにした。

香澄に押され、次は時哉の正面に座るツインテールの少女が小さく頭を下げて、

「深夏です。えーと……ど、とうも」

集まる視線に耐え切れず、早々に打ち切った。居心地が悪そうに目をさ迷わせている。

優姫の癪癢で空気が変わったが、確か、その前までの彼女は誰よりも複雑そうな振る舞いをしていた。時哉たちのように唐突に切り出された焦りの表情ではなく、試行錯誤を重ねたが結局答えは出せぬまま出番がやってきた　そんな顔。

結婚に賛同しきれないのだろう。

そんな深夏に香澄はそれと似た表情をして苦笑する。

「じゃあ次は」

最後に、優姫の正面に座る新雪のように白い肌をした金髪の少女。

少女は慌てふためき、顔を赤くして、

「は、はい。真冬と申します。好きなものはビーエ……読書です」

なぬ　！？

時哉は全身に雷が走ったような衝撃を受けた。

今、なんと言った？　ただしくは、なんと言いかけた？　なんと
言いかけましたか？

”ビーエ”？

それに続く言葉なんて”ル”以外に何があるというのか。

知能を滅多に駆使しないためか現在、本能、というか直感に優れている時哉は悟った。

(こやつ、優子と同じ匂いもしているし)

色で例えるなら桃色。

「腐女子か」

「な、なぜそれを!？」

隠し通せたとも思っただのか少女 真冬は過敏に反応した。

「さては超能力者」

「フ、なに。地球の回転速度を上げていどしかできんさ」

「なんとという所業……!! しかもそれをいどと切り捨てるとは、まさに神のみぞ知るセカイ!!」

「ちなみに予言もできるぞ。お前の部屋にはB L本が山積みになっ
ていよう」

「初対面の相手を一瞬でそこまで見抜くとは……! 凄いです!
凄すぎです!」

目を輝かせて真冬は祈るように手を組んで時哉を見上げている。

「だが、そんなお前に残念な事実がある」

時哉はそんな純粹無垢な少女を見てやり、悲しげにかぶりを振った。

「残念な……事実ですか？」

白い肌が更に蒼白になってしまふ。預言者（勘違い）の沈痛な表情が真冬の恐怖を余計に煽った。

時哉は深く頷く。

言うか、言わないか、正直迷った。たった一言口にすれば完結する話だが、それは彼女を傷付けてしまふ。

欠片ほどしかないにしても、彼にだって良心はきちんと存在しているのだ。

心の傷は目に見えない。医者もいない。

だから判断が付かない。

時哉は深いジレンマを抱いて、決断する　フリをして、

「その腐女子の位置には既に俺の幼なじみが君臨しているんだよ！」

強く言い放つ。

その顔にさっきまでであった沈痛なものはなく、むしろ憑きものが

取れたように「はっはー、言ってやったぜ」みたいな晴々しささえ見受けられる。

結論から言うと 所詮、時哉は時哉だった。

そして真冬はというと、

「な、なんですと!?!」

そのテンションに乗っかって驚愕に目を見開いていた。

自分で仕掛けておいてなんだが、こいつコレで大丈夫なのか？と感性を疑う。

時哉なら「で？ だからなに？」と冷たく切り返して攻めに転じるだろうが、真冬にそんな冷静な思考回路は繋がっていない。ほわんとした雰囲気らしく場の空気に流されやすいようだ。

儂げで、気が付けば脱いでカメラの前に立っでいそうで、しかも腐女子で、心配の種が生涯尽きることのなさそうな者が義理の妹になる。

(やつべえ。果てしなく面倒臭さそーだ)

できれば避けたかった真理に辿り着いてしまい、頭を抱えたくない。自業自得だが、だからと割り切れる話ではない。

「で、では真冬は用無しということなのですか?」

うん！ とは言えない。

「そんなことないが……空気になる感は否めないな」

「真冬は一体どうすれば……」

「悲観するのはまだ早い。お前と怪獣ユーゴドンが被っている部分は腐の部分だけ。後は真逆だ。真逆。もう一度言う、真逆だ。何度でも言う、真逆だ」

「怪獣なんて呼ばれているんですか？」

「ああ。火を吹く」

「なんと！」

「ばれたら打ち首獄門だ。きちんと釘を刺しておかねば。」

「確かにそれは怪獣と呼ばれても仕方ないかもしれませんが」

「鼻歌混じりに弟をウルトラ上手に焼くんだ」

「ハンターも兼任してましたか！」

「ユーゴドンならその世界でも遅しく生きていけそうだな。史上最強のハンターの称号を獲得しても何ら違和感もない」

「史上最強のハンター！ サ、サインももらえるでしょうか？」

「断言はできない。機嫌が悪い時に会えばとって食われるからな」

……やべ。

彼は冷や汗を流した。

「この脱線した話はいつまで続くのかな？」

対角線で盛り上がる息子と義理の娘になる真冬を交互に見合わせ
て、和也は呆れた声を上げた。

優姫が怖ず怖ずと答える。

「お兄ちゃん。きっと話の収集がつかなくなってるんだよ」

そこには純粹無垢な瞳に押され、珍しく顔色を悪くする血縁者の
姿があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2323u/>

これが主人公でいいんですか？ 外伝

2011年10月8日13時35分発行